

古座川流域がモデル地域に

森、里、海の関係解明で

京大フィールド科学教育研

京都大学フィールド科学教育研究センター(本部・京都府)は本年度、森、里(川)、海の自然や文化のつながりを研究する「森里海連環学」をスタートさせた。古座川流域から串本湾をつなぐエリアをモデル地域の一つに選び、自然や里域環境の学術的な価値分析や調査活動を進めるといふ。



計画について住民らに説明する田中克・京大フィールド科学教育研究センター長
(古座川町の中央公民館で)

京大フィールド科学教育研究センターは、2002年、全国10カ所にある京大の農学部や理学部に所属する現場研究機関を統合したもので、それぞれの特色を生かした新しい科学教育の展開を目指している。県内では清水町の和歌山研究林、白浜町の瀬戸臨海実験所、串本町須江の紀伊大島実験所が所属している。

「森里海連環学」では、森と里(川)と海のつながりを柱に研究する。モデル地域は熱帯域・タイ湾南部タラート川流域▽温帯域・太平洋「古座川文化圏」(熊野の森・古座川・串本湾)▽日本海「吉生の森・由良川・舞鶴湾」(北陸・京都)▽九州西岸「日田の森・筑後川・有明海(九州)」▽亜寒帯域・道東「標茶の森・別寒辺牛川・厚岸

湖・湾(北海道)」の5カ所。気候帯による違いなども研究する。

紀伊大島実験所の梅本信也助手(44)は里域生態系部門Ⅱによると、ダムから放水される水質などの調査が始まっており、「自然域と里域の水分析や動植物の多様性、紀州犬やニホンミツバチなど、資源生物を利用した文化相の研究なども視野に入れている。地質、気候、地形、土壌など総合的に地域を構成する要素を扱いたい」といふ。

古座川町内に現場研究施設を持つ北海道大学和歌山研究林(野田真人林長)も紀伊大島実験所と連携して共同研究を進める予定。野田林長(59)は「北大でも山と川のつながりの研究は重要視している。当面はまず、基礎的データの集積を地道

に進めることになる。その上で、連携できるものと具体的なテーマ研究を整理し、共同で進めていきたい」と話す。

研究を進める上で、地域とも本格的に連携することが求められるため、京大フィールド科学教育研究センターは5月26日、古座川町高瀬の中央公民館で、町民への説明会を開き、農協、漁協、森林組合の組合員、観光協会関係者や一般住民ら約20人が参加した。

田中克センター長(60)は「古座川流域・串本湾は、環境問題など、世界に発信できるような科学教育を生み出すモデル地区になる。壊れた自然を改善する活動において、住民からは、木材価格の低迷による林業の衰退と山の荒廃、広葉樹の植樹についてなど質問が相次ぎ、関心の高さをうかがわせた。

て、行政を動かすにも科学的根拠が必要になる。研究をそこに役立てたい。地元の自然関係の研究者やチーム、高校の生物クラブとの連携なども図っていきたい」と語った。